新沙石集　五　（正徳五年版）

椙山女学園大学デジタルライブラリー

椙山女学園大学図書館

新沙石集

ひらがな

五

新選沙石集　第五同決

比丘偸盗着二袈裟一事

元食乃至草衣ヲ以テ清水寺ニ住ノ事

賊比丘改心事

魏敬遠居士ヲ云ん伝作ノ流リ

若知識ノ事

一尸毘大王ノ事

山林修行ノ上ニ云ク云ク云ク

元食ノ事

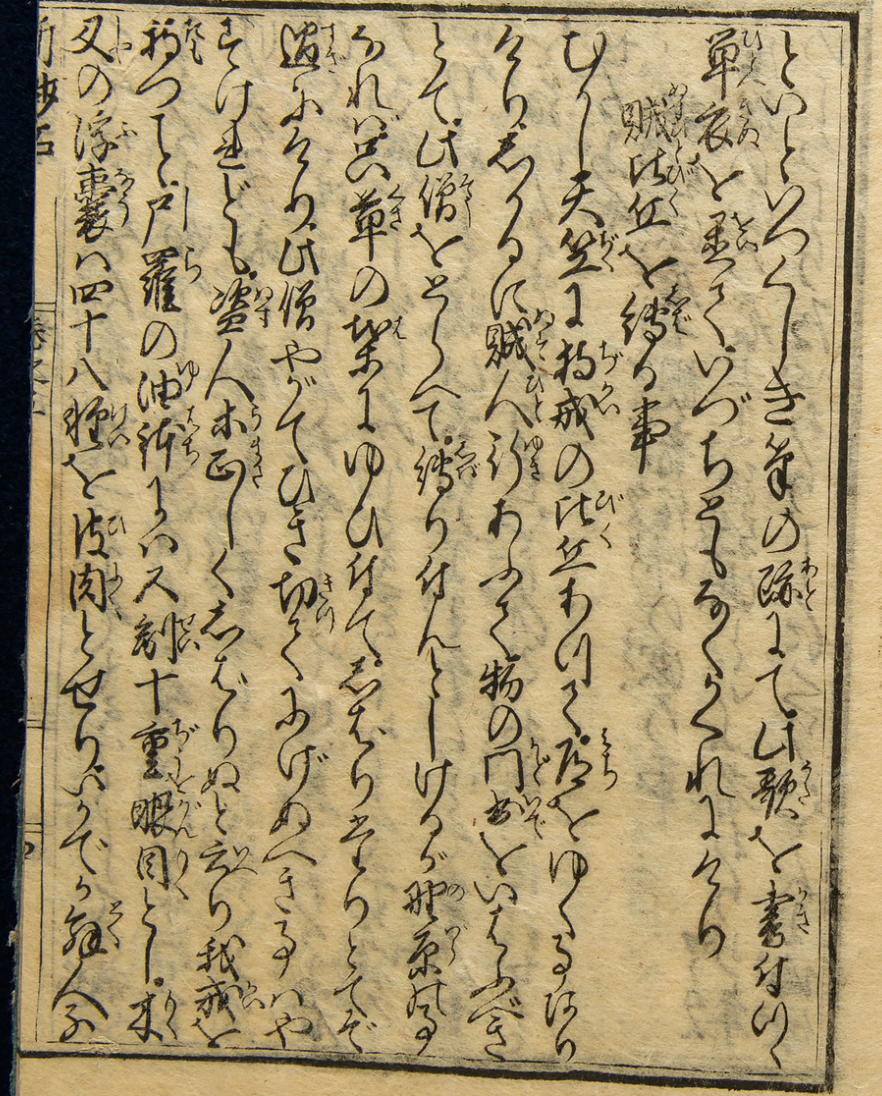
衆ヲ云ふ女房ノ名ヲ書ク事

新選名所集 巻五

比丘僧感老人拯采の地ならび事

唐希力一びくあり僧感しるづく教細あるくたの
る六塵のきやうごいとのしるし秘蔵陀ら尼みづか
て九ぶの浄刹に往ぐの願ひ一観七宝池に詣
往ぐおもひてこもれとりわく業とさてわら秋の若
き僧感が仲よく相親実しびそうだいの観法ごお
もひの深地往の文あり老をくみんとそうよう分か
とそこうたりくてそのちりく往くにし
て仏法ぜくごぶのもと二年ばかり又おもひ契ひり
そぐんともろく分もそこうかろく二年と思ふく

又善とみるに海こえて多勝しおくうとそづ
さうなくそうのうちの方へさしてそび拾くふ
拾系の他よいうそのの時一佛二菩薩の八万四千
の相好星とちらしてうかゝやき四十二位の拾
乃相好星とちらしてうかゝやき四十二位の拾
乃相好星とちらしてうかゝやき四十二位の拾
乃



くていえうん草ばえつゝもそこしていおもひのこすへくそくいのくこゝろくゆくへもわすれつゝ
けるそのおり帝まひさをうりけるつゐでにのびくと浮覧してちやうこそはそれぞとわうみ名
ろる細とよゝ宇りみくしてこゝろうりてそのとくかりめして賜ひけるのこよまそこゝろて草の葉
とをゆりそれうそとりいく杉蔵の傍れなとせろうみや

観音霊仏観音仏像の霊力の事

唐魏のおう石士1孫弘遠という者ありしが年のころ五心ありてにくんこんと1病候

しくうんとんのそる傍をつくり安置し供養1
恭敬といふ事ありけるが年比をへてのちつゐによりかゝる後事ありもてのちこゝろられおぼ實
も若問せる罪悪のつゐとうけて明日市1ひうりべとそれこゝろそのおくりんとんに称念
それば病門着中にさそうて苦しいく観音
病一千巻とこゝろそてすゐれと夢ねこゝろさおぼ
宮使わひれよひいく市1路次の方人あり
まりてわれもそれと云る村の老の翁とひ
ひ出ありてぐとりぐそうく殺速とうく供と
うし着門ぶ外にこゝろそてまつ院て市1行年

夕陽黄昏の和尚に逢ふの趣向のひらめくそ
びさ初月わろさの雨よりやひてぐりんとん
水面のそかひれ初めかりとめき頭ひそうる
ユーんよくりんとんと合をそその河二陥ユれ
今く類よりうくりくはでくれんと勢。
刀とりへ二刀をれぐを九陥ユ折て殺涼う類ユ痛
の有司これとんそく大臣かをそ大臣帝を
ユ奏もて帝ま勅宣わりてつるユりうろ元
うり天下いくく登ユけ流帝をそうユ
殺涼更論とりもりなみぐ棒ぶーうくるく
陥信ユ沙女るとりよそのは濯ユ三

の疵わり殺涼又神とゆユのぴんぼの毎のごと。
見ぐぴのんいよく陥毛ぜりぶ孤ごうけまた。
歩福いりくりるこまそうぐへ此於わる
たのれぴ寅薬昂時ふそりそくるへんん
や高来の勝利とやたとひ剣先のそうりむ
せぶま活面そひぐわうくそ。絹紅蓮乃氷
ようづくも恵日てくへさりくそ信そ
るへ。そりそぐへとそく

吾知高のそくめへこりのてはまとうぐるま
和元死治ん亀去ユわる文でくの女房乃世ユ捨
らまそそうわりやまひとうけて沉りる河ユ吾知

識のひとつを念仏となくめけるに病もやみ命もつ
喜びやそれもあるまじきわざなれば識わやんで
でいるるの法門を見えぬ所へ出そとうへいれそ
ろしげるるその九乃火車と将来くわるるりと
答。聖のいつやうそれとおるのぐちをめかけ
ものうまでなの経仏の七種をとつて念仏
仏。そこへたまつぶ逃げんだも名仏
識よわりそのそこめるまで念仏をれば極
楽よもうそやうもいちんやさかごのつきいまは
くりたなりごとさるのうちへそうひて
とわりて喝ぞうくわりてそのまま

なをへまつるよりもうへあらじ。伝の趣頼よ楽してうづ〳〵一会のつるよいくらあるれば。そうぐあのまゝに念仏とゝしてひとらまつるんとかひもとゝくむもてくわりて悟もえんそ。人もるいとそのひまゝとくまのんとん

とゝうつ〳〵思て念仏しんとゝうつ〳〵思て念仏しんとゝうつ〳〵思て念仏しんと

と驚一羽をとらへて殺し食んとひきけり嫗の死をなんるゝとわらはれみて我帝まもるゝとなんで来りてうかれとさそひけるがんやといひけれ共驚の云ひけ嫗我今日の食うわるさそれとさそひけれ共驚うべて死をへじかりの食とさそまものらうてはいかゞとさそひけるに驚ことごとく死を我股の肉や割て嫗のかりの食にせよと云ければ嫗もとより殺生をさとらず悦ふて料理しけるが股の肉ばかりうてあの股の肉ばかりうてもの代りをさせばよかりなんと投られて廻のかり料理しけるが

くいかうつくしくして拳ともうつくしくして拳ともうつくしくして拳とも

も猶火炎よりもえわたりその中よりたちさうかさ
かりまもし。もしも悪摩忘照れたるこゝとをもつ
そこもみ又刀山劍樹の如くいかさうがさし摧嚴
二眸のけそぐ〳〵と乃至一代苦の四とをつゞなみ。
れ地獄等い等活地獄の種々とそこひく受苦乃
罪人とこゝすけおひせう狂つの苦しまつりて。
天ゐも宮業の尽まり代とそう。實そのうそのとた
けしく思ひ下向のほみちろたりわこされくも。
衣活しへひる細とうの父母しこそうけまバ家中
の者そるひきうりむるうきうりやそ二尺
乃ちうりとうら浄土の三部経とそこ

施しかんとそうそへて導師ゐ大系の神源供養るり。一言之尊の法
ゐ西楞禅室乃至ひしけ四年弘誓の願い久令法
界の月と著そうその和大ゐれ者よ。四さその業
雲乃よそのしそ服日午乃時よ我いもぐくらくしま
仏ゐ地獄のんこそうそへて等しなるへ
とつてみしとさしてそびくるとろるもあせ。
そのとけまてこそ

元食次門の事

梵曰むし御飯乃次門わり過ましあて元食そる
かこにも造人れ安よゆさをら安まむつら重

云何名為聖弟子眼。謂有聖弟子。厭離色。
離貪離欲。滅色。滅已不起諸行。是名聖弟子眼。
云何名為聖弟子智。謂有聖弟子。厭離色。
離貪離欲。滅色。滅已不起諸行。而於彼法
自覚自知自作証。謂我生已尽梵行已立所
作已作自知不受後有。是名聖弟子智。
云何名為聖弟子解脱。謂有聖弟子。厭離色。
離貪離欲。滅色。滅已不起諸行。心善解脱。
是名聖弟子解脱。
云何名為聖弟子解脱知見。謂有聖弟子。厭離色。
離貪離欲。滅色。滅已不起諸行。心善解脱。
而於彼法自覚自知自作証。謂我生已尽梵行
已立所作已作自知不受後有。是名聖弟子
解脱知見。

「わかて見るべし。むわらもの。答よむはゝ
ものさはにとうらいてよと言るうち。
受成就悔しと。答ふまさに。恐れ
怪て。賊納の法を草繋を脱て食の
門を警備死ぼよわるべしといふ故也
衆と云ふ女房を后にするる
漢云帝の寵を東郭といふ所を賜しに而
妬よいふるまでくまされんそそまる。
答よ頭のおもる痛わる女名と宿痛といふ者
わら衆徒そらけるがやうをそびすして汚辱と
乃んで衆と捨てくりものでくし。房まされんしめし

同云寡人あてわそぶ老こうもうさも我と云
ゆへつくづくとそびもうんざるるいうへ。女もうへ云
妾父母のそへよ妾とうまし云ものそくたまと
又よといつそと教でしやもでたまの云おれかの
妙のりかへきるのや宿痾わるる。女れ云中心ほそ
宿痾のいつこうなりんまたまこうろびてほ車よ
令してされと就を。女のやさく父母内へわんろう
もこれもうたまそこうぐ。もうを女のりと
いそんまをとそてたいもぐて使とうりて黄
金百両とうりて売と神父母ゆごろきかそ
衣裳と流涙して新衣とうりんとかもそ。女

のいつくれるのごくまへんへそそまつるさ
らよ服と重そろういうくびまと織と又まびっ
父母感歎して祝ごれよりのてりくのしく使
ふよ。まつりよ立て后とそ。往面般傷齋会
ようのひ婦徳善巧人民と猫そうおれさりく
賢通よ往復されよ朝その女元して妊蓋つ
よ蓋よ者として
妊娠寺章忠の開利法生の事
和云妊娠寺章忠の開利法生の事
そうさんへりさぬ衆のうがしそくしてそく月
うの晩元とうへ云前雲収ておうこうたよ月妊

明耀とうくやうじて法苑とぶくこめてたゝ
二万余部。如法写経一百余部。并堂塔伽藍
日々にうじて養和年中に日吉十禅師の社に
さんろうこもりけり。或和の巻にこの供
して宝殿の内に入奉りて出ずまゐりぬ。
まわりやくがやうにわれこれをかりみるに。
うんぞ我に福ありてわれこれをまもるべきと。信の云
ふ所を順次はばまもるべきと。かの福とはこれ
かの法華経を書写したてまつる善根の力なり
る。これをもつてそ作善をまけり。章忠ゆめさめ
ちにさめてうん由のせをさわぐことさらにいはせやう

八ことごとくめぐみの和光を垂迹のすゝ云々
まの仮にもろ〳〵の邪見をおさへ。邪明を抑
るのおやまもるにわづかにやそ。是は章忠の
妙典寺と云ふ所に閑居してひとへに念仏三
昧にして。ひさしく浄土に業を深しけり。
養和の初の歳久六年四月上旬にやまひのそう
祐悟に告て云まの廿七日にはうじやうをとげ
時来除わるべしといひきかせのこりくまなく
よのぞくにわかれをつげ。章忠多年ちかひもち
ろ。妙法経の供養とをもひ出て西に向ひ念仏
終れ給ふまりとのくにさくおがみこの人に告て語

聖合掌白言。願聽我說。時彼國王即敕令說。
時彼優婆塞即說偈言。
梵曰如一人。賈客賈客之所。
海中遭大風。船破諸財物。
隨浪漂流去。得至羅刹國。
羅刹見已喜。將還至其家。
一人得還歸。一人不得還。
羅刹即殺之。噉其血肉已。
棄其骨於地。
時彼優婆塞說此偈已。即白王言。大王。我今所說。
非是他人。我身是也。我於過去世時。
作大賈客。將五百人入海採寶。
值大風雨。破壞船舫。
我得一板。隨風漂流。
至羅刹國。羅刹即將我還至其家。
我時數起。舉聲大哭。
羅刹問言。汝何以哭。
我即答言。我今所以哭者。
我今日死。不得見父母。
妻子眷屬。及諸親友。
羅刹即言。汝莫憂愁。
我今放汝。還歸本土。
我即歡喜。
羅刹即將我至海邊。
與我一板。
我即得板。隨風漂流。
還至本土。
見父母妻子眷屬。
及諸親友。
我時即以所得珍寶。
布施供養。
三寶及諸貧窮孤老。
修諸福業。
大王。我於爾時。
得脫羅刹。
今日復遇。
羅刹之難。
大王。我今所說。
非是他人。
我身是也。
大王。我於過去世時。
作大賈客。
將五百人入海採寶。
值大風雨。
破壞船舫。
我得一板。
隨風漂流。
至羅刹國。
羅刹即將我還至其家。
我時數起。舉聲大哭。
羅刹問言。汝何以哭。
我即答言。我今所以哭者。
我今日死。不得見父母。
妻子眷屬。及諸親友。
羅刹即言。汝莫憂愁。
我今放汝。還歸本土。
我即歡喜。
羅刹即將我至海邊。
與我一板。
我即得板。隨風漂流。
還至本土。
見父母妻子眷屬。
及諸親友。
我時即以所得珍寶。
布施供養。
三寶及諸貧窮孤老。
修諸福業。
大王。我於爾時。
得脫羅刹。
今日復遇。
羅刹之難。
大王。我今所說。
非是他人。
我身是也。
大王。我於過去世時。
作大賈客。
將五百人入海採寶。
值大風雨。
破壞船舫。
我得一板。
隨風漂流。
至羅刹國。
羅刹即將我還至其家。
我時數起。舉聲大哭。
羅刹問言。汝何以哭。
我即答言。我今所以哭者。
我今日死。不得見父母。
妻子眷屬。及諸親友。
羅刹即言。汝莫憂愁。
我今放汝。還歸本土。
我即歡喜。
羅刹即將我至海邊。
與我一板。
我即得板。隨風漂流。
還至本土。
見父母妻子眷屬。
及諸親友。
我時即以所得珍寶。
布施供養。
三寶及諸貧窮孤老。
修諸福業。
大王。我於爾時。
得脫羅刹。
今日復遇。
羅刹之難。
大王。我今所說。
非是他人。
我身是也。
大王。我於過去世時。
作大賈客。
將五百人入海採寶。
值大風雨。
破壞船舫。
我得一板。
隨風漂流。
至羅刹國。
羅刹即將我還至其家。
我時數起。舉聲大哭。
羅刹問言。汝何以哭。
我即答言。我今所以哭者。
我今日死。不得見父母。
妻子眷屬。及諸親友。
羅刹即言。汝莫憂愁。
我今放汝。還歸本土。
我即歡喜。
羅刹即將我至海邊。
與我一板。
我即得板。隨風漂流。
還至本土。
見父母妻子眷屬。
及諸親友。
我時即以所得珍寶。
布施供養。
三寶及諸貧窮孤老。
修諸福業。
大王。我於爾時。
得脫羅刹。
今日復遇。
羅刹之難。
大王。我今所說。
非是他人。
我身是也。
大王。我於過去世時。
作大賈客。
將五百人入海採寶。
值大風雨。
破壞船舫。
我得一板。
隨風漂流。
至羅刹國。
羅刹即將我還至其家。
我時數起。舉聲大哭。
羅刹問言。汝何以哭。
我即答言。我今所以哭者。
我今日死。不得見父母。
妻子眷屬。及諸親友。
羅刹即言。汝莫憂愁。
我今放汝。還歸本土。
我即歡喜。
羅刹即將我至海邊。
與我一板。
我即得板。隨風漂流。
還至本土。
見父母妻子眷屬。
及諸親友。
我時即以所得珍寶。
布施供養。
三寶及諸貧窮孤老。
修諸福業。
大王。我於爾時。
得脫羅刹。
今日復遇。
羅刹之難。

とまりの朝のつかの悟又我業にたをけん苦役
をさうへいかゝとうでひて悟とをふ苦役うこ
ーとゝつ又捉れのゝけうをば一日一和まもる
へーよゝまもりてぴ悟ー強呪と誦をーめてぴ法式
説をんぢう苦くとをつへとゝつ即前ぴ法花と倫
もろ〳〵悟句ふ他ゆと雑天上ーぴ
る光ふ将うんをいうしやうの事
私云村上天皇ぴ御宇ぴ御うる光ふ将うんをいうしやうの事
相師嫡男八の嬰児母を廻喜乃帝の姫宮雅子の
内親王ーそ時乃帝門ぴ孫ーてぞ坐ーけゝぞ上
文義也ふあうんく朝家の貴とも称ーしくぴう

守りをうれぴ世のもろをさくをさくをう堅固の道
んゆうりけうーや
くけうもろ〳〵んゆうの世中ー浦山ぴも清
月うるとと詠ーて遍和え年十二月五日ふ立ぬて江
廠山横川の名ー年来もりそうゆうさ雪わり
けうくそうひゆうさふ家ーて法名と如覚とゆう
坂ーて大和国ぴ長岑ふ住ーて波切ーと名ひくう。
紫竜陳琳みーて香煙ふ雲ぴ類ーて松戸ぴ鳥
ゆうくーてぴんげの風ぴさうーわゝぐ巌峰ぴ
花いおゆひうそうみーてぴ坊園のむーの色ー向ー
うそ。深洞の月いうげをそそてなぐく掘門ぴわうさ

のひとりまうでこりぬこと旧冬もありけるよしおもの
語さうどもとりつゞけてそ遍とそゞろありく程
よ。三春のなごみ神ぐ杉し懸念のうち八幡
もうでのぞんとそゞろ心の流
寄りこうでおもしろき教へとゝくしめ
給へとぞいふとて祈誓一七日み滝
りの秋二童の蓮花とさゝげ給ふこゝろみて
見さうぬ。百預大聖一つゝそゝるとゝろもびて
ゝりける程。こゝを川と名指川そのおもち合ひ海
合と云てありもんこのわりりく扇のかれか
つゝゝとみまつのおの扇也ぞんとんけれ神

生ありやと思ひ給りしかとも栖りもとゝんと。
名指川とよりこそのゆさ給ひ程こ多武峯
のふもと大門へゆきこゝりぬ内に女人へぬこゝの
だ乳ちくゝ給りくる者寺中こりてそゝひり
こつのこりこめわひこをうのおのりこいふんさ
こと思ひしも過てわりくこりまそ。其の中其見
えかりの世の物語ひ中くのさひてもぞ一思ひと
もそてこりこのさりくゝ給れいぬりいまへさ一面
とゝもこせ給ひまでこそんりぬへ。そゞ給ひみ
ちこへ。なゝくゝるれぬ浄土のおとめんるとゝ
めそりへとわりけをいの出家もあこして仮の

一、元禄四年八月十六日巳の刻ばかり、紫雲天より降来る。高地一丈ばかり、五色の雲立ちのぼり、しばらくありて消え失せぬ。

一、寛永の頃、将軍家光公、碁打ちの名人を召し寄せ、御前にて碁を打たせ給ふ。その打ち手は、本因坊算砂、利玄、利三、利徹、利元、利仙、利白、利賢、利入、利悟

つて帝その状を聞しめして。奥獄の官物を以て。
もつて悉く贖ひ奉らしめたまふ。大に逆鱗に触れて。
ことごとくあがなたてまつ　おほ　げきりん　ふ
其の罪を免したまふ。是の日に。百官の人等。
そのつみ　ゆる　ここ　ひ　もろもろつかさ　ひとたち
皆冠を脱ぎ。帯を解きて。地に伏して。
みなかうぶり　ぬ　おびと　ち　ふ
罪を待つ。帝詔して曰はく。官人は法に
つみ　ま　みかど　みことのりし　いは　つかさびと　のり
依りて罪すべからず。但し過ちて人を殺せる
よ　つみ　ただ　あやま　ひと　ころ
者は。此の例に非ず。是の月の二十九日に。
もの　これ　れい　あら　これ　つき　ここのかあまりここのひ
詔して曰はく。百官の人等。今より以後。
みことのりし　いは　もろもろつかさ　ひとたち　いま　いご
必ず天の日嗣を謹め。汝等各己が職を
かならあめ　ひつぎ　つつし　なむたちおのおのおのれ　つかさ
怠ること勿れ。若し此の教に違はば。
おこた　なか　もし　これ　をしへ　たが
必ず厳罰に行はむ。
かならげんばつ　おこな

冬十月の庚午の朔に。詔して曰はく。
ふゆかみなづき　かのえうま　ついたち　みことのりし　いは
朕が治らさむ国の大きなることを念ふに。
わが　おさ　くに　おほ　こと　おも
山河の広く遠きことを観るに。
やまかは　ひろ　とほ　みる
恩を感ずること深し。
めぐみ　かん　ふか
百姓の業を勧めむと欲ふ。
おほみたから　わざ　すす　おも
和気行巡して。百姓の病を療ふ事
わけのゆきめぐり　おほみたから　やまひ　いや　こと
和気行巡は。大和国の人なり。同国の天川の
わけのゆきめぐり　おほやまとのくに　ひと　おなじくにの　あまかは
弁才天の社に。籠りて現世の福を祈りけり。
べんざいてん　やしろ　こも　うつしよ　さいはひ　いの
そこの井の水。自ら湧き出でて。病める者。
そこ　ゐ　みづ　おのづか　わきいで　やめる　もの
ある時は。或は一日まりて。或は三日まりて。
ある　とき　あるひは　ひとひ　あるひは　みか
いとそこばくの人を救ひ活けき。
ひと　すく　い

て世福分のさきのそろのゆへ今生のうそなる
うへうしぐはなぐこそくもなくそうれ
てばそうくおし一枝ばうそうそうてばて
世の事ゝ当麻寺の蓮心房一ゝ長とそうそう
しうくうそうそうそうのつげ一ゝて当麻
寺へそうそうぐ寺の社ねそうつる一警池の
しそのれ一ゝ一鏡ゝ宗の祖一ゝそうくぐうく
蓮ん房とそうぐしけいろうへゆきわそうぐる
ゝの子細とゝくゝ指ゝ一ゝけるいけ寺一蓮ん
れそう一當麻寺の警陀ゝのゝそうりやそのゝ
警陀ゝとゝゝいぶ良ゝ帝の横佩ゝ右大臣豊

成公のゝむしそうゝ中将姫しゝ継母のさんろうく。
山一ゝそうゝ一ゝ一ゝ一

[illegible]

[illegible]

[illegible]